

## 「安息日とイエス」（ルカによる福音書六章一〜五節）

### 1 安息日

「ある安息日に」という言葉から、今日の箇所は始まっています。ご承知のように安息日というのはユダヤ社会の休日のことです。曜日というと土曜日。前日、金曜日の日没から安息日に入ります。

「安息」の名の通り、この日は仕事が休みになります。むしろ働くことが禁じられます。旧約聖書の十戒にその規定が明文化されています。安息日について何をどう考えるにしても、ユダヤ教でもキリスト教でも、この規定がすべての基本ですので、はじめにそれを掲げておきたいと思います。

安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である（出エジプト二〇・八〜一〇）。

十戒の第四戒です。この規定にあるように、安息日を守ることは、ユダヤの地に暮らすすべての人に命じられています。家畜もその恩恵にあずかります。こうして徹底されるべき掟です。

しかし安息日は、ただたんに何も「しない」日、仕事を「しない」日ではなく、言うまでもなく神を礼拝「する」日でもあります。「聖別せよ」とはそのような意味です。安息日は、神の全能と主権を、人が何もしないことによって証し「する」日であるのです。

十戒のこの規定は、ユダヤ教において、今日まで厳守されてきました。いまでも厳守されています。ですから外国人からは、土曜日に仕事をしない、それを安息日として礼拝している、あの人はユダヤ人かと、割礼と並んでユダヤ人のアイデンティティ「独自の性格」と見られてきたのです。安息日は、キリスト教において、キリストの復活の日、日曜日の礼拝に取って代わられることになりました。キリスト教の日曜日の礼拝はユダヤ教の安息日の伝統を引き継いだものでもあります。この意味はまた後で少し触れたいと思います。

安息日の重要性は、イエスのガリラヤ伝道を私どもがここ何回かにわたって見てくる中で、すでにみなさんお感じになられていることではないかと思えます。何よりイエスは、安息日に会堂（シナゴグ）で教えることから、神の国の福音の宣教をスタートさせたのです（四・一六以下）。最初に癒やしをおこなったのも安息日、会堂においてでした（四・三一以下）。

他方、ユダヤの社会と宗教の指導者を自認していた人たち、イエスと対立することになる、今日の箇所にも出てくる「ファリサイ派」、そのグループに属する律法学者たちにとっても、安息日を、自分たちの理解に従って民衆にどう守らせるかは、彼ら

の関心の中心にあったことです。

しかしこの重要な安息日ですが、いま十戒にある規定を改めて見ても、安息日を大切にせよ（聖別せよ）ということと、仕事をするなということ、簡単に言えば、この二つのことしか書いてありません。

基本的にはこれでいいのだと、私などは思いますが、ファリサイ派や律法学者らにとつて、それだけではどうにもならないことであつたのです。仕事をするな、とあります。仕事をしないとはどういうことか、それをいくつも「安息日してはならないこと」（二節）として決めて、それらを守ることが安息日を大切にし、聖別することの前提だという論理を立てたのです。

こうして彼らは、旧約の本来の神の命令に従うための人間的な規則、定めを、事細かに作り上げて行きました。

今日の箇所に関係のあることと言えば、安息日してならないことの中に、収穫してはならないというのがあります（出エジ三四・二一）。収穫作業は確かに仕事ですから、きつとダメです。病気を積極的に治療することも、食事の支度もしてはならない（前日に済ませておく）。火も使つてはいけない（出エジ三五・三）等々。安息日に薪を集めたため罰せられ、石で打ち殺されたことが民数記（一五・三二）に出ています。そもそも外出は決められた範囲を越えはなりません。

こうしたことを決めてもらつていたほうがいいという場合も、あるいはあるのかも知れませんが、それまでして、神の本来の掟に従おうとしたことは、むしろ立派なことという評価もあるかも知れません。

しかし問題は人間の現実の生活というのは、どんなことが起こるか分からない、決めていても、そうできない、したくてもできないことが、つねにある、くり返し起こるということではないでしょうか。そのときどうしたらよいのでしょうか。そのとき神に従うとはどういうことなのでしょう。

## 2 ファリサイ派の非難

安息日を巡るファリサイ派の人たちとのやりとりのきつかけになつたことが、今日の箇所のはじめに次のように描かれています。

ある安息日にイエスは麦畑を通つて行かれると、弟子たちは麦の穂を摘み、手でもんで食べた。ファリサイ派のある人びとが、「なぜ、安息日してはならないことを、あなたたちはするのか」と言った（一〜二節）。

これによると、イエスと彼の弟子たちは、麦畑を通つていました。麦畑の中に道があつたのです。春でしょうか、秋でしょうか、どちらにしてもすでに麦は実りの季節を迎えています。

そのとき弟子たちは「歩きながら」（マルコ二・二三）穂を摘み始めたのです。彼らは空腹だったとマタイは書いています（一二・一）。相当の空腹だったのだと思えます。このことが、いま申し上げた、人間の現実の生活にはどんなことが起こるか分

からないということです。

フアリサイ派のある人たちが、空腹にたまりかねた弟子たちが麦の穂を摘んで食べているのを見つけて、直接彼らを非難いたします。あなたたちは安息日にしてならないことをしている。

この場合の「安息日にしてはならないこと」とは何でしょうか。ひとまずフアリサイ派の言い分に耳を傾けてみましょう。

フアリサイ派が非難しているのは、弟子たちが他人の麦畑に入って食べている、簡単に言えば、盗み、それを非難していると、私もはもしかしたら思うかも知れませんが、そうではありません。旧約聖書には、旅人は他人の麦畑に入って穂を手で摘んで食べてもよい、あるいはぶどう畑に入って、好きなだけ食べてもよいという規定があったのです（申命記二三・二六）。ただしその場合、籠を持って行ってぶどうを集めたりしてはいけませんし、鎌を使って麦を刈り取るようなこともしてはいけません。それは「収穫」になってしまいます。場合によってはそれは窃盗です。ここで弟子たちが麦の穂を摘んだことは収穫には当たらないので、聖書的には安息日にも本来許されることでした。

しかし、この穂を摘むことが、当時のユダヤ教の中では収穫作業と同じに見なされるようになっていたようなのです。フアリサイ派の人がそう言っていることに現れています。穂を摘むことが収穫だとしたら、それは安息日に、まさにしてはならないことなのです。もう一つのことも問題になったことが暗示されています。それは「手でもんで」食べたというところです。「手でもんで」というのは、まさに食事の支度をする行為に当たると見なされます。マタイやマルコにはこの言葉はありません。ルカがこの言葉も付加して、それもフアリサイ派がとがめた理由だと言っているように見えます。それも安息日にしてはならないのです。

細かい指摘です。しかし彼らフアリサイ派の人々には、弟子たちが空腹に襲われているという現実は見えていません。むしろ弟子たちが掟を守っていないところだけが見えたのです。律法をないがしろにしている、神をないがしろにしている、これを許しているイエスも同罪だと言うのです。

### 3 安息日の主、イエス

イエスの反論を聞きたいと思います。

イエスはお答えになった。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。神の家に入り、ただ祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを取って食べ、供の者たちにも与えたではないか」。そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主である」（三〜五節）。

イエスは、フアリサイ派に反論するために、ここでダビデ王の故事を持ち出しています（サムエル上二二章）。

ダビデがサウル王に追われ、ノブの祭司アヒメレクのところに逃げて行ったときの

エピソードです。空腹のダビデは、祭司しか食べてならない、供えのパンを食べたというのです。

このイエスの答えで、第一に重要なことは、ファリサイ派によるイエスの弟子の批判、つまり、安息日にしてはならないことをしているという批判は、じつは聖書そのものからではなく、彼らファリサイ派の、当時のユダヤ教が定めた物差しをもつての批判であったのに対し、イエスは聖書のお話そのものによってファリサイ派に反論していることです。

第二に、イエスは、逃亡中のダビデが空腹だったというところを見ています。ダビデは、じつはその日は安息日だったようですが、祭司にしか許されなかった供えのパン、祭壇から下げられたパンを、ふつうのパンがなかったために食し、供の者にも与えた。これが許されるとしたら、イエスの弟子が安息日に穂を引いて飢えを満たすことは当然許されるということです。

こうした比較の大前提には、イエスが、自分をダビデと同じところに見ているということがまあります。いづれにせよ、ダビデが規則に縛られなかったように、イエスも、また弟子たちも、縛られてはいけません。「人の子は安息日の主」。イエスは人間的な規則のものにはいない。イエスは安息日の主です。それゆえこの日、この方の言葉と行為と無関係に神の全能と権威、神の憐れみ（マタイ一二・一）が証しされることはないのです。

さて最後に、安息日と主の日の関係を少し申し上げておきたいと思えます。先に触れたように、ユダヤ教の安息日は、キリスト教の主の日に引き継がれました。四世紀にローマ皇帝コンスタンティヌスによって日曜日が休日になったことによって、主の日が、キリスト教の安息日として祝われることが、ますますはつきりしてきましたように思えます。

日曜日には安息日の意味があるのです。その意味の一つは、すべての人が、仕事を休むということです。働くことが人の使命ではないのです。すべての人が神の安息に与るべきこと、主の日はそれを証しています。

第二に、安息日が、七日目、最後の日であることに注意したいと思います。「主の安息日」という言葉が十戒にありました。神の永遠の安息、神の国の到来を、それは証しています。主の日、日曜日は、その神の国の永遠の安息を予め指し示し、それが始まっていることを証します。

第三に、安息日は、申し上げたように、神の民イスラエルがイスラエルであること、いわば標識、しるしのようなものでした。イスラエルとは何であるか、そこで見えるものとなったのです。旧約には安息日を汚す者は死刑に処せられるとくり返し記されています（出エジ三一・一二他）。それは旧約でももつとも重要な掟であったからです。私どもキリスト者も、私どもの安息日、すなわち、主の日を厳守し、私どもが神の民であることを世に証ししたいのです。

その意味で、いま礼拝を控えざるをえない状況は痛恨のことです。一日も早く元に戻るように今日も神に祈りたいと思えます。それは全世界の、すべての教会の、すべてのキリスト者の切なる祈りにほかなりません。